

七十五年を越えて

熊本県立済々黉高等学校

森下 優

一九四五年八月九日十一時二分、長崎に原子爆弾が落下され、長崎のまちは焦土と化しました。

私が初めてそれを文章としてではなく、確かに存在した過去としてとらえ、平和について真剣に考えるようになったのは、小学校六年生の修学旅行のときでした。そして、すべての日程が終わったあとの感想文には「平和を守るためには知ることが必要」と書いていました。そのときの私はみんなが戦争の被害を知れば、戦争は二度とおこらないと考えたのです。

しかし今になって、それでは足りないのだと気づきました。確かに私たちは被爆者の方の体験談を聞き、原爆の、戦争の悲惨さを知ることができました。しかし、もしその機会がなければ私たちは戦争を「国と国の戦い」という言葉として考えていたのではないのでしょうか。私たちは実際に被爆者の方から話を聞くことのできる最後の世代です。よって私たちは平和の大切さを伝え、広げる努力をしなければならないのです。

私はこの夏休み、高校生一万人署名活動実行委員会の活動で長崎の平和研修に参加しました。そこで特に二つ、心に残った学びがあります。

一つ目は日本の加害の歴史です。これは小学生のときには学びませんで

した。岡まさはる資料館にはその資料がたくさんあり、驚きました。「四万人近くの朝鮮や中国の人が強制動員により、ろくな食事も与えられないまま、炭坑やダムなどの危険な場所で働かされていた」「民族性抹殺の皇民化」「七三一細菌部隊による生体実験」。どれもすぐには受け入れがたく、ひどくショックを受けました。

今まで私は、「教えられなかった」を言いわけに、被害の面ばかりを見て、加害の歴史を学んできませんでした。資料館を出た後、何かが肩に乗ったような重さを感じました。私は戦争に参加してはいないけど、同じ日本人なのです。きっと知らない方が楽に生きていけたのでしょう。ですが、知らなければ良かったとは思いません。この学びは私が平和活動をしていく上で必要なものだったと確信しています。

二つ目は、原爆による犠牲者です。そのほとんどが女性や子ども、老人でした。爆心地から約五〇〇メートルのところにある城山小学校。その被爆校舎は平和祈念館となっており、原爆の悲惨さを訴えていました。私はその中であつた紙芝居に目を奪われました。題名は『ふりそでの少女』。そこには場にそぐわない、晴れ着を着て薄化粧をした二人の少女が描かれていました。二人はこれから火葬される所でした。楽しみにしていた誕生日だったのだそうです。それなのに死んでしまったからせめて…と。

また、永井隆記念館で見た『母が「これはおいしいからみんなで食べようね」と言っていた桃缶はここにあるのに母はもういないのだと妹も僕も…』という文章が頭から離れません。

どうして、子どもたちが、母親が死ななければいけなかったのでしょうか。あまりにも理不尽ではないですか。答えはそれが戦争だからなのです。戦争は善い人も悪い人も、戦争を選んだ人もそうでない人も無差別に殺します。だから戦争はあってはならないのです。

七十五年前のその日、原爆が落とされた場所で、平和の鎖をつくり、黙祷を捧げました。戦争の犠牲者の冥福と恒久の平和を願って。

熊本に戻ってから、高校生一万人署名活動に参加しました。戦争・原爆をなくすために小さな力ではあるけれど、できることをしたいと思ったからです。

私は重要だけど、難しくない活動だと思っていました。しかし、「本当にこんなことで原爆がなくなるの」と面と向かって聞かれたとき、何も答えることができませんでした。自分ではこの署名には意義があるものだと分かっていたのに、伝えることができませんでした。それがとても悔しかったです。

戦争や原爆のことを知ることはもちろん大切で、そしてそれを伝えるの

にも力があるのだと分かりました。その力を身に付け、これからの署名活動などの平和活動に取り組んでいきたいと思えます。